



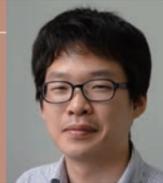
アルマス広場

Lima, the city of Spanish kings

# スペイン諸王の街「リマ」

## ペルー、リマ

Special Features / Civil Engineering Heritage XIII



株式会社オリエンタルコンサルタンツ/関東支店都市デザイン部  
金野拓朗 (会誌編集専門委員)  
KONNO Takuro

特集  
土木遺産 XIII  
ラテンアメリカ 古代文明から現代文明への転換を支えた土木技術

### カラフルな世界遺産都市

ペルー共和国の首都リマは、創建から現在に至るまで南米大陸太平洋岸の中心的な都市である。沿岸部の砂漠地帯中央部に位置し、寒流のペルー海流が海面上の空気を冷やし上昇気流の発生を妨げるため、年間を通じてほとんど雨が降らず、曇天となることが多い。

市街地は歴史的な建造物が多く残る旧市街と、高層ビルが林立するオフィス街である新市街からなる。1535年、インカ帝国の征服者であるスペイン人のフランシスコ・ピサロが創建した。彼を始めとする征服者達はスペイン・アンダルシア地方の出身が多かったことから、旧市街にはその影響が色濃く残っている。その街並みは、色鮮やかな壁面やバルコニー等が特徴のコロニアル様式と呼ばれる建築物が立ち並び、内部にはアンダルシア風のタイルが残るなど、背景の曇り空とは対照的に街全体がカラフルに彩られている。また、他のスペイン植民都市と同様に市街中心部に広場を設け、それを囲む

ように教会や市役所、郵便局等の行政施設を配置し支配の象徴としていたと共に、碁盤の目状に街路を配していることが特徴である。

旧市街には2つの中心的な広場がある。1つは中心部



写真1 サン・フランシスコ教会・修道院



写真2 右手がサン・クリストバルの丘



写真3 リマで最も古いカテドラル

に位置するアルマス広場であり、ピサロはこの広場を中心に碁盤の目状に街を築いていった。現在では毎正午に衛兵の交代式が行われ、創建時から変わらぬリマの代表スポットである。もう1つはサン・マルティン広場で、ペルーの独立を宣言したホセ・デ・サン・マルティンの名が冠されており、比較的歴史は新しいが、市民の憩いの場となっていてイベント等が頻繁に行われている。

このような建築・都市計画的な特徴が評価され、1988年にはサン・フランシスコ教会・修道院が、1991年にはリマ歴史地区全体がユネスコの世界文化遺産に登録された。

### ピサロによるインカ帝国の征服

このようにリマは、建築や都市計画に焦点が当てられることが多いが、都市創建までの背景や経緯が述べられることは少ない。そこでまず、征服者・ピサロがインカ帝国を発見し、征服する過程をたどってみる。

時代は大航海時代の15世紀末から16世紀前半である。コロンブスがスペイン女王イサベルの援助を得て、1492年に西インド諸島に到達した後、スペイン人の植民地支配が拡張していく。その中でピサロは、太平洋を南下して南米大陸の海岸地域を調査すると、インカ帝国領土内であったペルー北海岸の都市を発見する。彼は一旦スペインに帰り国王と交渉し、その征服を一任された。わずか180名という少数部隊を引き連れ、インカ帝国が支配していた当時のペルーに上陸したピサロは、金銀等の財宝を採取するため、キリスト教の布教を名目に、インカ帝国を次々と撃破し、自治都市としてクスコやハウハを建設していった。ハウハの建設は大量の金銀が集積していたからである。アンデス山脈内の山岳都市であるハウハは不便なため、後に海岸に近いリマを

建設し、ハウハの住民は全てリマに移り住んだと言われている。

船舶による貿易が都市繁栄のための必須事項であったことから、鉱山等の資源が豊富な山岳都市を1つの拠点として有しつつ、沿岸部に拠点を併設することは時代の要請であったのだろう。

一方で、リマは厳密には港湾に近接していない。リマ創建後、アンデス山脈で産出された銀等はパナマ経由でヨーロッパへ輸出され、ヨーロッパからはワインや布等が輸入された。その拠点はリマから約10km離れた港湾都市カヤオであった。なぜ、ピサロはカヤオではなく海岸から離れたリマに中心都市を創建しようとしたのだろうか。

### リマ創建の背景

その大きな理由は海賊にある。当時、イングランドの海賊を中心として、スペインの貿易船や植民都市を襲撃することは日常茶飯事であった。後にリマが市街地の外周に城壁を構築したように、海賊への対処は支配者の悩みであり続けた。ピサロも例外ではなかった。彼自身がインカ帝国を征服した海賊であったことも、当時の海賊がもつ軍事力の強さを人一倍脅威に感じていた証である。では、海賊への対処に配慮して、海岸から離れた位置とすることを決めながら、リマが選ばれたのはなぜだろうか。



写真4 ピサロの遺体が安置されている棺



写真5 城壁公園に残る城壁跡



写真6 住宅地に残る城壁跡

1つは地形にある。サン・クリストバルの丘と呼ばれる標高400m程度の丘陵が旧市街北側に位置しており、地政学上この丘が見張り台として適していたと考えられる。現在はリマを代表する観光地となっており、丘の上にはピサロが建てたと言われる巨大な十字架がそびえ、その麓には大統領官邸から良く見えるように鮮やかな色を塗ったという住居が張りついている。

リマとカヤオを繋ぐリマック川の存在は、ピサロの判断に影響を与えたのだろうか。リマック川は水深が浅いため、交易はラバ等による陸路が主体であったと推測され、舟運の利便性は低かったと考えてよい。リマック川からは用水路が引かれ、砂漠地帯でありながら小麦やトウモロコシ畑、果樹園等への灌漑が可能であった。実際に建設地には集落が存在しており、都市生活を支えるリマック川の産業面での貢献は大きかった。また、その肥沃な大地には樹木が生育しており、住居建設のための木材調達が可能であったことも、リマック川近傍に適地を選定したもう1つの大きな要因であった。さらに、地元インディオが敵対的でなく、都市の防御が比較的容易であったことも挙げられる。

このようにピサロは、外敵への防御性や地形、産業といった複合的な要因から中心都市の建設地を選定し、1535年1月18日、「諸王の街」と名付けて創建を宣言した。現在はリマと呼ばれているが、その語源はリマック川の左岸に位置していたためと言われている。

ピサロはこの6年後となる1541年、インカ帝国残党の内乱に巻き込まれて没する。その後のリマの繁栄を考えると、さぞかし無念であったに違いない。現在、彼自身が礎石を置いたカテドラルはアルマス広場の正面にそびえ、その内部にはピサロの遺体とされるミイラが安置されている。

### 都市の変遷と城壁

16～17世紀のリマはペルー副王領の首都として、また南アメリカのスペイン帝国全体の首都として、行政及び商業の中心的な都市であった。そのため海賊等からの襲撃が続き、インディオとの関係も悪化したことから、1684～1687年にかけて市街地の外周に城壁を築いた。城壁の素材は日干し煉瓦や、リマック川から産出される玉石と粘土からなり、34の五角形の稜堡から構成されていた。稜堡には砲台や銃眼等が無く、インディオや海賊への対処としては壁だけで十分であった。

しかし城壁は1872年に撤去された。その理由の1つは、リマの人口が1700年頃に約4万人、1850年頃には約12万人と増加し、都市拡張の必要性が迫られたことである。加えて、1784年や1821年にペルーを襲った大地震に対して、煉瓦造りの城壁は脆く、そのたびに破損し修復を繰り返していたことも影響している。城壁が取り除かれた場所は幹線道路や交差点として整備され、現在の旧市街の外周路として新たな骨格となっている。

今でも旧市街には、リマック川沿いに整備された城壁公園や東部住宅地内に城壁が残っている。東部住宅地は治安の悪い低所得者街であり都市開発の波がまだ及んでいないことが、城壁の残存に寄与したのだろう。その城壁は複数の種類の石材で構



写真7 城壁公園のピサロ像



図1 リマ市街地の平面図。赤線が城壁位置

築されている。これは、住民が城壁の一部を勝手に撤去し住居化した跡であり、一説にはリマック川へのアクセス路や、バルコニーも設置されていたという。かつてのリマック川は市民の愛着ある場所であったのだろう。残念ながら現在のリマック川はハイウェイ等に挟まれ、市街地からアクセスしづらくなっている。

城壁公園には1935年のリマ建都400周年を記念にピサロの故郷から送られた彼の騎馬像がある。かつてはアルマス広場付近に鎮座していたが、市民運動によってここへ移設されたという。撤去ではなく移設となった経緯は定かでないが、侵略という行為の一方、リマの都市骨格を明確に築いたピサロに対して、リマ市民は憎悪の感情を抱いているだけではないのかもしれない。

### 旧市街の課題と展望

旧市街にはコロニアル様式のカラフルな建築だけでなく、キンチャと呼ばれる、日本でいう木骨モルタル造に似た構造形式の建築が一部に残っており、旧市街の街並みに厚みを与えている。しかしキンチャによる建築は地震によって倒壊しやすく、幾度もリマを襲った大地震により今では希少性の高いものとなっており、耐震補強等による保全が求められている。旧市街全体に目を

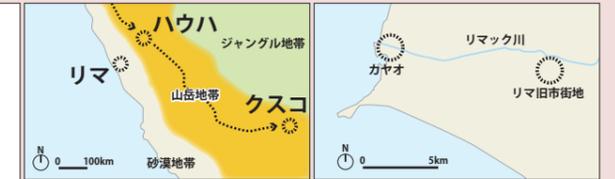


図2 ピサロの行程

図3 リマとカヤオの位置関係



図4 旧市街の建築立面

向けると、建築の高さ規制により旧市街の乱開発を未然に防ぐ等、旧市街の歴史的価値を保全する取組みが進められている。

また、リマを訪れた際に最も印象に残るものの1つは渋滞であろう。特に朝夕の通勤時の渋滞は激しく、すいている時の何倍も時間がかかる。渋滞の原因は人口や政治機能等がリマに集中していることと、交通インフラが脆弱だからである。ペルーの人口の1/3となる約1,000万人がリマに住んでいる。面積と人口が東京都とほぼ同等であるのに、鉄道は1路線しかない。また自動車の運転マナーも悪く、車線変更が頻繁に行われ、クラクションは鳴り響き、現地に慣れていなければ運転は困難な状況である。旧市街には自動車が多く流入し、街の魅力が観光客には感じ難くなっている。交通量の低減策等による交通計画を含めた都市全体のマスタープランといったマクロな施策と、個々の建築の価値を保全するミクロな施策の両輪によって、街の魅力をより醸成していくことが望まれる。

#### <参考資料>

- 1) 『EL CENTRO HISTÓRICO DE LIMA』(リマ市パンフレット) PROLIMA
- 2) 『CENTRO HISTÓRICO DE LIMA』(市街地の建築分布図) PROLIMA
- 3) 『興亡の世界史12 インカとスペイン帝国の交錯』網野徹哉 2008年 講談社
- 4) 『ペルーを知るための66章【第2版】』細谷広美 2012年 明石書店
- 5) 『世界史史料7 南北アメリカ先住民の世界から一九世紀まで』歴史学研究会 2008年 岩波書店
- 6) 『天空の帝国インカ その謎に挑む』山本紀夫 2011年 PHP研究所

#### <取材協力・資料提供>

- 1) PROLIMA (リマ市)
- 2) Beatriz Arakaki (通訳)

#### <図・写真提供>

- 図1 PROLIMA/加筆 金野拓朗  
 図2、3、P22上、写真5、6 金野拓朗  
 図4 PROLIMA  
 写真1 近藤安統  
 写真2、3、7 有賀圭司  
 写真4 塚本敏行